
舞台裏の出演者達

とうゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

舞台裏の出演者達

【Nコード】

N6972X

【作者名】

とうゆき

【あらすじ】

境界線上のホライゾンの短編集です。続きそうな終わり方でも基本1話完結です。原作のネタバレを含むのでアニメのみ方はご注意ください。

Arcadiaにも投稿しています。

【出雲の無欲者】本編数

十年前の尼子家の話。2巻既読済み推奨。

【戦場の夢追い人】

武蔵の一生徒の視点による三河戦。1巻下のネタバレ有り。

【

無音世界の音楽家】ネタに走りました。割と設定無視。境ホラというより新伯林の知識が必要かも。

【滅びゆく都市の元主従】尼

子家シリーズ完。 3巻下のネタバレ有り。 【航空都市の嫉み者
共】壁に耳あり障子に。 2巻下のネタバレ有り。 【大三島の戦
姫】原作だこのパターンないなあ、と思ったネタ。

出雲の無欲者

名	尼子・経久
属	出雲教導院
役	生徒会長
種	全方位謀略家
特	無気力系謀聖
名	きつ
属	出雲教導院
役	庶務
種	侍女
特	内助の功

内から出でて
人の足を止めるもの
配点（諦観）

出雲に存在するとある神社。鳥居をくぐり、石段を数段上ったところ
に一人の人物が座っていた。

平四つ目結があしらわれた極東の制服を纏い、左腕に「生徒会長
尼子・経久」と書かれた腕章を付けた青年。

彼は右腕を肩の高さまで上げ、そこに一羽の鳥をとまらせていた。
それもただの鳥ではない。鳥といえば通常は二本足だが、その鳥は
一本多い三本足、つまりヤタガラスである。

「それでな？ 総長連合の亀井・秀綱というのは政治関係も優秀で
そちらの仕事を任せてるんだが、ここ一番で失敗するんだよ」

「それは大変でありますな——」

「まあ、亀井君にはいずれ私の三男や毛利の謀將を怒らせる仕事があるし……」

と、彼がそこまで言った時だ。石段を誰かが上ってきた。

彼は微かに警戒したが、現れたのは侍女服の少女だった。その姿は人に対してどこか無機質な印象を与える。

それもその筈で、彼女は無機物で構成された自動人形だった。

経久様、と少女は感情の希薄な声で主である青年に呼びかけた。

「おお、きつ君か。……悪いが、また今度」

「では、これにて失礼——」

そう言ってヤタガラスは飛び立っていく。

きつと呼ばれた自動人形の少女は飛び去るヤタガラスを視界の隅に入れつつ歩を進める。

「経久様、今のは？」

「九官鳥だよ。それより何か用事があったんだろ？」

「はい。鉢屋衆所属の自動人形から共通記憶による報告です。本城・常光様が「ちよつと三征西班牙に遊びに行ってくる」と出ていかれました。これについて政久様が意見が欲しいと」

「……総長や副長が許容しているなら生徒会が言う事はない。第一特務に関しては自由にさせろ」

教導院の政務のトップである生徒会長、経久は面倒臭さを隠さずに告げた。

石段に座る経久の数段下で立ち止まったきつは、彼のなげやりな

返事に対して、了解しましたと律儀に反応を返した。

「それと聖連から使者が来ています。現在は詮久様が対応中」

「……桜井・宗的の歴史再現か」

「IZUMOを欲する毛利家や六護式仏蘭西が聖連に働きかけたようです」

「いい加減焦れてきたな」

困ったものだと思ふ詮久は溜息を漏らした。

しかし、その場に座ったまま動こうとはしない。

「詮久様一人に任せるつもりですか？」

「詮久にはいずれ晴久を名乗って生徒会長も兼任してもらうつもりだからな。仕事に慣れる良い機会だ」

それにこれは大した案件でもないと思ふ詮久は言葉を続ける。

「聖譜記述によれば嫡子を殺された尼子・経久は怒り狂い、降伏を認めず皆殺しにしたという。故に向こうも中々乱を起こしてくれない。いや、我々としても歴史再現は行いたいのだが、相手方が仕掛けてこない事には動けない。こちらから攻める事も出来るが、自分達が勝利する戦だから強引に歴史再現を行おうとしたと思われては聖連の理念に反する訳だし、困る」

「そういう名目で歴史再現を引き延ばすのですね、分かります。てつきり経久様が自分に解決出来ない無理難題を詮久様に押し付けていたのだと思っていました」

「……仏蘭西製の自動人形は全てお前のようにセメントなのか？」

やれやれと思ふ詮久は両手を石段に付けて体重を後ろに預ける。

毛利・元就の伝で六護式仏蘭西から貰ったのだが、とんだじゃじ

や馬だった。

経久が昔に思いを馳せていると、きつが首を傾げた。

「もしや最近、三征西班牙と連絡を取っていたのもこの為ですか？」
「……私はただ、桜井・宗的の歴史再現を終えたら遅れを取り戻す為に、最初の月山富田城の戦いまで一氣に行おうかと大内家に打診してみただけだ」

これも大きな仕事という訳ではない。
先方にとっても悪い話ではないからだ。

「いずれレパントやアルマダの海戦で敗北する三征西班牙は極東側の大内では戦力を温存したいと考えている。吉田郡山城の戦いでは勝利するものの、続く月山富田城の戦いでは敗北。この戦いで大内・義隆の養嗣子である大内・晴持が死んだ事が大内家衰退の一因だと言われているからな。だから向こうはこの歴史再現は引き伸ばしたい。尼子家としても尼子・久幸を失う敗戦であり、直後に私が死去する郡山合戦の歴史再現は行いたくない」

長々と喋って少し疲れたので一息つく。

「敵が二人いるならそいつらを戦わせればいい」

そこまで言って経久はふと気付く。

きつの能面のような顔に僅かに驚きが浮かんでいた。

基本無表情の彼女の表情が変化したという事は相当驚いているのだろう。

「どうした？」

「いえ。謀聖の字名は虚名ではなかったのだと改めて認識しました」

「そうか」

經久にとってはどうでもいい話だった。

三十年戦争で覇者となる六護式仏蘭西には聖連も含めて敵が多い。自分が動かなくてもどうにかなったと思えてしまう。

「それだけに疑問なのです。どうして經久様が総長を詮久様に任せて生徒会と総長連合の二頭制にしたのか」

「ん？」

「聖譜記述から推察するに尼子家の衰退原因は一族同士や国人衆との軋轢です。遠征理由の多くは領地獲得ではなく国内を纏める為とさえ言われています」

「……」

經久は口を挟まず無言で先を促した。

「塩冶・興久の乱やそれに端を発する新宮党の勢力拡大が尼子家を疲弊させます」

「……国久だって馬鹿じゃない。今は久幸も健在だし、新宮党にも無茶はさせないだろう」

そもそも桜井・宗的の蜂起を再現しないのは塩冶・興久の乱を行わせない為でもある。

「それでも同様の事態に陥らないという確証はありません。総長も兼任して権力強化を行うのが尼子家の繁栄に繋がると判断します」

「戦いは苦手なのだな」

「トップに必要なのは人を使う才と責任を取る覚悟。經久様はどちらも兼ねていると判断します。そもそも神の血を引く經久様なら人並み以上に戦闘もこなせるでしょう」

「だがなあ」

「怠慢は罪悪だと思考します」

「……愚考すると言えば控え目になると思っちゃんいけないな、きつ君」

……神代の頃には人形が人になったと聞くが、それはこいつのよ
うなタイプだったのだろうな。

「詮久に任せた理由は、総長を兼任していると、毛利や大内がIZ
UMOを欲しいと言ったら一存であげてしまいそうだからな」

「……は？」

きつの声は相変わらず感情がなかったが、経久には返答までの間
から彼女が呆気に取りられたように感じられた。

「単純な話だ。どうしようもなく自分の手から離れる物に執着がで
きるか？」

「……」

今度はきつが経久の言葉に口を挟まなかった。

「大内の属する三征西班牙は衰退こそすれど滅びることはない。毛
利の属する六護式仏蘭西はこれから昇り調子。それらと対峙する我
等尼子家は毛利に滅ぼされなくてはならない」

IZUMOは優れた航空艦の技術を持ち、尼子家もその技術力を
利用して「月山富田」や「尼子十旗」などの戦力を整えたが、それ
も無駄だろうと経久は思う。

聖譜記述で負けるとされた側が狙うのは、戦術レベルで勝利した
後で敗北を宣言するというものだが、

「尼子の滅亡は歴史再現の解釈でどうにかなるものではない」

毛利家からはいずれ関ヶ原の戦いで西軍の長となる毛利・輝元が現れる。

歴史再現で西軍に付く国や勢力としては少しでも毛利家に力を付けてほしいだろう。

それらの圧力を撥ね退けるのは難しい。

「詮久様達はその流れに抗っておられます」

「……慣れ親しんだものが失われるのは辛いからな」

その感傷は経久にも理解出来る。理解出来るのだが。

「だが、どうせ百年も経てば自然に変わる。変化を楽しむ事も必要だと思う」

失わせないようにする事は出来るかもしれない。だが、失われなくて変わってしまう。

ならばわざわざ抗う意味がどこにあるだろうか。

それが神の血を引き、これから数百年は生きられる経久の率直な考えだった。

「主家が滅んでも残った人々が抵抗を続けます。経久様は彼等を見捨てるのですか？」

「尼子十勇士だったか。貞幸の孫もいたな。幸いの名を持った男がどう生きるのか気になるが、それこそどうしようもない。滅ぶ、栄えるの契機を見る前に尼子・経久は歴史再現から退場だ」

尼子・経久は戦死した訳ではないので郡山合戦の後に円満に引退

という事になるのだろう。

そうなってしまうえば歴史再現に関わる事は困難だ。色々派手に動きすぎたし、襲名はもとより一般生徒として行動したとしても他国から余計な警戒を生む。

一応、後に残される者の為に出雲産業座や英国と協議してIZU MOが中立化するよう進めている。

けれど、そうして助けた者達が天寿を全うしても自分より早く死ぬのだと思うとどうにも遣る瀬無い。

「では、そもそも何故生徒会長などをやっているのですか」

……嫌なところを突くな。

「……尼子家は帝から出雲の管理を請け負った訳だが、極東に生きる者として帝の勅命は全うしなければな」

「どうも言い訳臭いですが」

経久自身、この答えが言い訳染みているという自覚があった。

もつとも、まったくの出鱈目という訳でもない。

上位者から任せられたので信頼に応えたいというのは紛れもない本心である。帝なら自分と同じかそれ以上に長生きするという事もある。

さりとて、一番大きく自分の心を占めているのは別の思惑だろう。それは、

「成した功績はなくならず、不変だ。本物の尼子・経久の名が聖譜記述に残っているようにな。私はそれに意味を見出しているのかもしれない」

人の生き死に関心を持たず、ただ結果だけを重視する。そう表

現すると随分と冷酷である。

……無欲よりはマシだが、謀士と呼ばれても仕方ないな。この戦乱の時代には正しいのかもしれないが。

「経久様？　どうかされましたか？」

「いや、下らない事を考えていた」

経久は尻に付いた汚れや埃を払いながら立ちあがる。

「吉童子丸に土産でも買って帰るか」

きつが何か反応する前に経久は階段を下りはじめる。

それでも、背後に幾らか意識を割いてきつがしっかり付いてくるかの確認は怠らなかった。

出雲の無欲者（後書き）

まあ、この時期に尼子・晴久が総長というのはちょっと無理があるけど。

書いてて思ったけど、義経と似てるところあるかな。あるいは初期のセグンドか。

「天性無欲正直の人」と「謀聖」の両方をやろうとしたら物に執着しないのに仕事はきっちりこなす妙なキャラクターに。

尼子十勇士は史料によって名前が違ってから十人以上いた、というネタをやるうとしたが、二代の発言によるとしっかり十人だったみたい。残念。

戦場の夢追い人

王が道を示したなら

あとは行くのみ

配点（邁進）

怒号と火薬の破裂音、そして金属のぶつかり合い。

自分が身を置いていたのはホライゾン・アリアダスト救出の為の最前線。葵・トリーを中心とした突撃隊の中だ。

自分の役目は分隊の抑えを超えて追走してくるK・P・A・Italiaの戦士団の相手。

先程までは教皇総長が保持する大罪武装”淫蕩の御身”によって武器が骨抜きにされていたが、今は副会長本多・正純の一計によって武装が使えるようになっていた。

既に三征西班牙の審問艦は見ており、今のうちに少しでも前身しておきたい。

その為には殿である自分の役目は大きい。自分が役目を完璧にこなせば突撃隊は背中を気にせず、前だけを見ていればいいのだから相手は熟練者で構成された正規の戦士団。精強な軍勢はそう簡単には打ち払えない。だが、

……それがどうした！

無くなった筈の内燃拌気は回復している。

その意味、自分の先に行く馬鹿が払っただろう代償を思えば、ここで挫けるのは、

「武士の名折れだ！」

踏み込むと同時に足に鳥居型の紋章が展開、更に突き出した槍の穂先も流体を纏う。

突きの一撃は相手の防衛術式に阻まれて刺撃からただの打撃になり、転倒させるに留まるが今はそれで十分だ。
すぐさま反転して突撃隊に合流する。

●

自分は尼子家に仕えた家臣の家系だ。

尼子家が滅ぼされた後は義理の祖父も父も再興運動を行っていたという。

だが、寡兵ゆえに戦いに敗北し、彼らが旗頭としていた人物は自害して再興運動は途絶えた。

もう尼子家の再興は不可能だろう。

けれど、再び出雲の地に戻る方法はある。

単純な方法だ。松平家が極東を支配した後で出雲の藩主になる人物を襲名すればいい。

それは意味のない行為かもしれない。

しかし、このままでは主家に仕え、主家の為に死んでいった人々が余りに報われない。

家臣の一族である自分が出雲の地の管理を任せられれば、多少なりとも彼らの行動が報われるかもしれない。

●

それが子供の頃の夢。

青年と呼べる年になった自分はその夢を半ば諦めていた。

各国の暫定支配を受けている現在の極東情勢では襲名者も六護式仏蘭西が出してくるか、極東から出しても傀儡だろう。

父から手解きを受けた槍の訓練こそ継続していたが、それさえ言い訳に使う為にすぎない。

何もしなかった訳ではない。自分は頑張った。悪いのは自分を取り巻く状況だ、と。そんな小さな達成感を得る為の努力。

そんな諦観を抱えていた矢先に起こった三河の消滅と武蔵内での相対。

相対が終わり、馬鹿が出陣するとき、自分はそこに加わっていた。

……可能性を貰った。

それは馬鹿が言ったことであり、自分の実感だ。

前方でくねくねと妙な動きをしている男は”不可能男”の字名の通り何も出来ない。

教導院の入試に合格出来る程度の学力はあってもそれだけだし、武力の方では高等部はおろか中等部の学生にも負けるかもしれない。それなのに、

……世界に抗ってみせた。

多くの人間が姫の自害を仕方ないと思っていた中で反抗の声を上げ、こうして多くの人間を動かした。

それはまさに皆を率いる王の所作だ。そのときの自分は畏敬の念すら抱いてしまった。

●

と、回想に浸っていると馬鹿と視線が合った。

「おいおい何だよ俺の方をじっくり見て！ まさかコクリに行く前にコクられちまうのか！？」

思わず槍をぶち込みたくなったが必死に我慢する。

「お前みたいな馬鹿に出来る事なら俺にも出来ると思ったただけだよ！」

先程までの回想を誤魔化すように叫ぶと、

「——へっ」

馬鹿はしたり顔で笑った。

「——っ！」

猛烈に負けた気分になった。
そんなとき、

「！」

不意に、大気が鳴動した。

ふと見れば、穂先の刃が曇っている。とりあえず石突きで馬鹿を小突いてみるが、来る筈の反発がない。
それが意味するのは、

「大罪武装か！？」

北側に目を向けると、戦士団の相手をしていた分隊が一気に飲まれかけている。

だが、それは大罪武装の力だけではない。

在り方こそ違うが、教皇総長も紛れもない王だ。彼が戦場で力を振るい、声を放てばその下にいる者達は奮起する。

そして士気全開のK・P・A・Italiaの戦士団がこちらに

殺到してくる。

恐らく自分達が審問艦に辿り着くより向こうに追いつかれる方が早い。

向こうには豊富な経験がある。緊張による体力や精神力の消耗は少ないだろうし、戦場における術式の扱いや荒地の踏破能力など、こちらとは比べ物にならないだろう。

その上戦場を横断した自分達と違って疲労も軽度ときている。

殿の自分はそんな相手と真っ先に相対しなければならない。

初陣にしては随分と厳しい戦場だ。

「けどまあ……」

自分の父は尼子家の再興運動の折、主君を見捨てた。当時の状況はよく知らないし、歴史再現に則った行動の筈だが、少なくとも父は見捨てたと認識していた。

昔話として尼子家のことを語って聞かせてくれたときもその場面になると言葉を濁らせた。

力が足りなかった。口惜しそうに語る姿が目には焼きついている。

現在M・H・R・R・にいる父は敵味方から槍の名手と謳われたらしい。そんな父でも主君を守ることは出来なかった。

父より未熟で、武装が使えない自分がどこまでやれるか疑問があるが、

「賭けてもいい。そう思っちまったからな」

馬鹿と、そいつが惚れた姫なら自分の夢が叶う国を作ってくれる。そう信じてここまで来た。それはここから先も同じであり、そこに怯えや後悔は必要ない。

背後を振り向き、迫りくる戦士団を睨みつける。

父からは攻撃だけでなく守り方も叩き込まれている。

全員に対処するのは無理だが、足並みを乱すことくらいは出来るだろう。

相手がそのまま強行したなら突撃隊が一度に相手をする人数を減らせるし、足並みを揃えようとしたなら幾ばくかの時間を稼げる。

実にお得な話だ。

……これが上手くいったら父にこう言おう。あなたが生き延びて戦い方を伝授してくれたから守るべき主を二人も守れた、と。

その場に立ち止まり、重りに成り下がった槍を放り投げる。

先に行く仲間達が息を飲む音が聞こえた。

彼らは次々に自分の方を振り向き、

「――行くのか!？」

それは確認であり、気遣いだった。

しかし、馬鹿だけはこちらを振り向かず、だが走る速度を僅かだけ上げた。

それが馬鹿なりの信頼だったのだろう。

それを嬉しく思い、そして覚悟を決める。

「俺はここまでだ。総長のお守りは頼む！」

「――Jud。」

応えながらも、何人かが悲痛な顔や申し訳なさそうな表情を見せた。

「安心しろ。別に死ぬつもりはない」

何しろ、

「——この戦いが終わったら神社に酒や歌を奉納する仕事があるかな！」

「馬鹿あ——！」

仲間達の声を受け、それを原動力に変えて敵の群に飛び込む。

無音世界の音楽家（前書き）

ネタに走りました。割と設定無視。境ホラというより新伯林の知識が必要かも。

無音世界の音楽家

拝聴せよ

我が音楽

配点（音楽家）

M・H・R・Rは国力維持の為にマクデブルクの掠奪以前は旧派と改派の争いは控えていたが、それでも小競り合いは存在していた。

これはそんな戦いの一つ。

戦いも佳境を過ぎた頃、戦場に一つの動きが生じた。

旧派側の指揮官、M・H・R・R旧派領邦の有力者であり選帝侯でもあるケルン大司教の旗艦、ボンの甲板に二つの人影が現れたのだ。

髪を風に靡かせる男と侍女型自動人形だ。

男の外見は黒髪で耳当てをしている。

右は碧眼、左は赤眼。だが、左目をよく見れば眼球が透明で奥の血管が透けているだけだと分かる。

左手にはヴァイオリン本体を、右手には弓を保持している。

「1648年以降ゆえ傍論からの登場申し訳ない」

眼下の兵士に一礼し、

「ルートヴィヒ・^{ムンツァー}楽聖・ベートーヴェンだ」

突然現れた男に対して改派側は警戒を強めた。

旗艦に乗っている人員は役職者でなくともそれに準ずる実力者である可能性が高い。

しかし護衛艦に守られて戦場の後方に位置するボンのベートーヴェンの行動を制止する事は出来なかった。

「本日は私の聴覚を材料にした神格武装」シュトゥルム「嵐」そのお披露目演奏会にこれだけ集まってもらって恐悦至極。では早速演奏を始めよう」

ベートーヴェンは左手で持ったヴァイオリンを肩と顎で支え、弦に弓を走らせる。

荒々しくも流麗な調べが紡ぎ出されると同時、

《嵐はすべてを飲み込む暴風である》

大気中に詞が放たれた。

その直後、戦場に巨大な音が連奏した。

「説明しておこう。」嵐「から奏でられた音楽は流体を打撃力に変換する」

そこまで言ってベートーヴェンは首を傾げた。

地上では数百メートルに渡って兵士の誰もが打撃を受けていた。

それはベートーヴェンを中心に、波紋のごとく彼から離れるにつれて威力が弱くなっている。

つまり、

「引つ込め、ヘボ音楽家！」「ただの音響兵器じゃねーか！」

旧派側から怒号が巻き起こった。

●
「何分初めてなので調整が完璧ではなかった。申し訳ない」
《嵐は人の支配を受けない》

耳は聞こえなくともおよその状況を察する事は出来る。
ベートーヴェンは謝罪を口にしたが、

「ただ、私の音楽は身分や貧富の差に関係なく万人が聞く事が出来るものだから」

いまいち反省が見られない。

そんな彼の肩を背後に控えていた自動人形が指で軽く叩く。
表示枠を展開しながら振り向いたベートーヴェンは右目を閉じ、
左の赤い目だけで自動人形を見据える。

「なんだい、テレゼ君。君の声はとても綺麗な色をしているから、
聞こえないのが実に残念だ」

テレゼと呼ばれた自動人形は問いに答えず、自らの額をベートーヴェンの額に押し当てる。

「自重してください。指、折りますよ？」
「——!？」

大仰な動きでベートーヴェンはふらつき、仰け反る。

「……悲愴な気分だ。この熱情、どう表現すべきか」
《嵐とは天の涙である》

今度は上から下という指向性を伴った打撃が兵士達を襲い、再び怒号が起きた。

名：ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

属：ケルン教導院

役：楽長

種：音楽家

特：失聴者

無音世界の音楽家（後書き）

新伯林の強臓式やネシンバラの幾重言葉見てたらやってみたくなつたネタ。他に書いてた話より早く書きあがってしまった。

しかし、ベートーヴェン、祖父の方でも1700年以降なんだよね。聖譜記述の傍論ってどの辺りまで記載があるんだろう。大人しく当時の音楽家にした方が良かったかな。

滅びゆく都市の元主従

すれ違う二人

ともに感じるのは

非力な我が身

配点（相対）

マクデブルク西方で行われていた六護式仏蘭西の武神とM・H・R・R、P・A・Odaの戦い。

一機の武神が剣を振り上げ、眼前の敵陣を薙ぎ払おうとした瞬間、いきなり剣の柄から先が宙に舞った。

武神の視覚素子はその原因を確かに捉えていた。

槍を携えた男だ。M・H・R・Rの制服の上に陣羽織を纏った男が武神の手首の高さまで跳んで剣を断ち切ったのだ。

P・A・Odaの学生が顕現させた天使を足場として着地し、男の口が言葉を作る。

「名乗らせてもらつ。M・H・R・R、A・H・R・R・S所
属、近接武術師、——亀井・茲矩」

そして槍を構え、更なる攻撃に移るべく身を沈め、

「——！」

弾かれたように視線を西の丘側に向けた。

前田・利家の加賀百万Gの戦士団を越え、五十体程の侍女型自動人形の銃士隊が戦場に加わったのだ。

それを指揮するのは三銃士ではなく、六護式仏蘭西の制服を纏う中年の極東人。

「——くっ……！」

茲矩の表情が目に見えて変化した。

そして彼は天使を踏んで跳躍、銃士隊の前に立ち塞がる。

●

三列になって進攻する自動人形の後方にいた指揮官は茲矩を確認すると部隊を停止させた。

「M・H・R・Rの亀井・茲矩だ。名乗れ」

「……ブロイ伯フアンソワ・マリィ。六護式仏蘭西のEcole de paris所属だ」

指揮官は微かな躊躇を見せてから名乗り、それを茲矩は嘲った。

「俺の前でも今の名を名乗るか。それとも過去をなかった事にしたいか？」

言葉を切り、一呼吸置く。

「元出雲教導院総長兼生徒会長、尼子・義久」

視線に力を込めて義久を睥睨する。

睨まれたブロイ——義久は沈黙したが、やがて口を開く。

「勝久の事をまだ根に持っているのか？」

それは尼子家の再興活動において旗頭になった人物の名だった。

「当然遺憾はある。あの頃、俺達が復興運動をしていた時、お前は
何もなかったな」

「そう、何もなかった。敵対せず、何もなかった。それでは不
満か？」

「あの状況で何もしないのは敵対と同義だろうが！」

義久本人が動けずとも解釈次第で幾らでも支援は出来た筈だった
のだ。

にも関わらず一切の支援はなく、激戦の中で茲矩達は疲弊してい
った。

尼子十勇士も一人また一人と力尽き、残ったのは三名のみ。

甘えがあつたと言えばそれまでだが、かつての主君から支援がな
かったのは心にしこりとして残る。

「牽制にはなっていたと思うが」

「貴様……！ 復興運動には尼子家の臣下が大勢いたんだぞ！ そ
れを見捨てて……」

茲矩の激昂を、義久は軽く受け流した。

「なあ、茲矩。——いつまでも滅んだ主家を語るのは忠義ではなく
陶醉と言っただ」

「——！」

茲矩は自身の顔が引き攣るのを自覚した。鼓動や血の流れがやけ

にはつきりと感じられる。

彼には義久の考えが分からない。どうして容易く支配を受け入れられるのか。

支配されれば理不尽に奪われる。それは義久とて理解していると思っていたのだが。

「仏蘭西に下ったのは私だけではない。彼等を守る為には必要な措置だ」

「そして隷属を受け入れたか」

かつてのトップを優遇してみせた上で帰化した者を管理させるのは反乱を防ぐ為の支配者側の常套手段だ。

「滅ぼされた事を屈辱に思い、抵抗する者もいれば、命や生活の為に諦める者もいる。IZUMOへ逃げても再び攻め滅ぼされるのではないかという不安は付き纏う。そんな人々が六護式仏蘭西に亡命したとてそれを非難出来ないだろう」

「だからこそ英国との協力や歴史背景を武器にIZUMOを中立化させた」

「結果論だな。IZUMOが仏蘭西に支配される可能性も十分にあった。それに先日の武蔵との戦いの内容も知っているだろう？ 総長エクシヴや副長テュレンヌの猛攻による恐怖は拭えぬ」

「それをさせない為に幸盛殿や正光殿は戦い続けたし、俺も亀井・茲矩を襲名したんだ」

茲矩は語調を強め、双眸に力を込める。

それは自身の半生を否定されては堪らないという半ば意地のようなものだった。

「欧州の覇者となる六護式仏蘭西もその内部は戦費などで財政は崩

壊寸前。亡命者は今後真つ先に犠牲となる立場だな」

「……ブロイ伯を襲名する際にアンヌ・ドートリッシュと約定を結び、最低限の生活を確約させた」

「この時代の最低限は0でないというだけだろ」

信念に基づいて互いの論をぶつけ合わせた二人だったが、不意に両者の間で言葉がなくなった。

「これが私とお前の平行線だな」

「ああ、そして境界線はない」

●

茲矩と問答している間、義久は手元に出した小さな鍵盤を叩いて実況通神を行っていた。

これが三銃士や部下の自動人形達なら共通記憶を利用した高速の遣り取りが可能だが、生憎と義久は生身だ。

ブロイ：『面倒な奴が出てきたな。あ、流石に表示枠見ると向こうがぶち切れそうだから質問とかには答えられない』

001：『T e s .』

ブロイ：『尼子家はトップが神の血を引いていた上に拠点が出雲だったから神奏術が盛んだったが、特にあれの祖父である多胡・辰敬は有数の使い手で、代演を利用して多数の神の力を得ていた。加護は多ければ効果が薄れるが、そこは質より量という発想だろう。応用が利くしな。茲矩もかなりの奏者で毛利相手にヒッシャーしてたみたいだな』

021：『誰か当時の戦いの記録の照会を』

032：『押忍。聖譜記述では内政の手腕を評価される武将ですが、戦場でも戦功をあげています。毛利側は殺害を試みたようですが羽

柴に行く聖譜記述だったので断念したとか』

047：『織田や羽柴は神奏術の使用にも躊躇がないので厄介だと判断します』

ブロイ：『主校じゃなければ特務、いや副長クラスか。猿から琉球でも貰って引き籠ってればいいものを』

指が最後の字を入力し終わると義久は軽く呼吸を整える。

視線の先では茲矩が膝を曲げ、身を僅かに沈めた。走り出す為の準備動作だ。

やれやれと聖術を使う為の術式契約書を取り出す。

六護式仏蘭西へ下った折りに服従の証として神道からT s i r h cの旧派に改宗している。

当初は抵抗があつたが、今は何も感じない。人間は慣れる生き物だという事だ。

●

茲矩が飛び出したのと同じタイミングで銃士の自動人形が長銃を構え、術式火薬の光と硝煙、銃声の合唱が大気に放たれる。

狙いは正確だ。こちらに対して全弾命中を考えず、左右に避ければ自分から銃弾に当たりに行くよう弾道を描いている。

この辺りの連携は自動人形ならではか。

しかし、と茲矩は思う。

鹿島神宮の軍神や熱田神宮の剣神から戦闘関係の加護を得ている自分には不十分だ。

槍を斜めに構え、うねらせるように振るえばそれだけで銃弾が弾かれ、逸らされる。

次弾はない。先込め式の長銃は重力制御である程度の連射は可能でも茲矩には遅すぎた。

茲矩の足下に鳥居型の紋章が一瞬生まれ、すぐに弾ける。それと同時に茲矩も跳ぶ。

上というよりは前に。自動人形の頭上ぎりぎりを飛び越え、義久を捉える。視線の先にいる義久の手の中で術式契約書光になって消えるが、構うものか。

着地した段階で両者の距離は至近。あと一歩で槍の間合いに入る。躊躇わず踏み込み、槍の一撃を放つ。

義久は突きに呼応するように後退しながら腰に下げた太刀を抜刀、迎撃を行う。

返ってきた手応えを吟味しながら茲矩は攻撃の手を休めない。

「――」

突きの連撃は目にも止まらぬという表現が的確で、薙ぎは穂先の銀光が一つに繋がって見える。

身体能力では聖術によって強化した義久が上だったが、手数では茲矩が圧倒していた。

最初こそ的確に対応していた義久も次第に動作に淀みが生まれていく。

そして決壊は程なくして訪れた。

防御術式も制服も容易く貫き、義久の心臓を突き破る。

「が……」

義久は口から吐血し、頭と両手は力なく垂れ下がる。

「……敵将、尼子・義久討ち取つたり」

呆気なさを感じながら茲矩は槍を引き抜く。

だが感慨に浸る事は出来ない。後ろには義久と接近戦を演じていた為に待機していた銃士隊がいるのだ。

槍を頭上で回して穂先に付着した血を吹き飛ばしながら反転。

その直後、視界の中央に入れた自動人形の胸部が弾け飛んだ。

……は？

崩れ落ちる自動人形の意味を考えようとした茲矩は、全身に怖気を感じた。

肌で感じる空気の動きと耳元の風切り音、思考より早く体が動いた。

槍を片手で保持して背後に振る。直後、石突きが何かとぶつかった。

素早く振り返った茲矩は有り得ないものを見た。

「……いつの間に不死と再生の力を手に入れた」

「残念だが私は純正の極東人だ」

不敵な笑みを浮かべて義久が立っていたのだ。

胸の部分に穴が空いているが、そこから覗く肌には傷一つない。

義久の言が事実なら何らかの武装か術式の効果であり、茲矩には思い当たるものがあつた。

「神格武装、荒身国行か！」

またの名を頼国行。

尼子・義久と家臣である大西・十兵衛の逸話に美化とこじつけという解釈を加えて造られた神格武装。

通常駆動では所持者が負ったダメージを部下に移す効果を持つ。

かつての尼子家の主君は戦闘においては家臣より優れ、また内部に不安を抱えていたのであの神格武装を使う事はなかった。

だが、

……核と記憶素子さえ無事なら幾らでも作り直せる自動人形なら躊躇せずに使えるという事か！

人に尽くすのが本懐の自動人形なら怨みを持つという事もない。

その時、後方で長銃が構えられる気配があつた。

茲矩は咄嗟に前に踏み込み、義久の肩を掴んで位置を入れ替え、楯とする。

……！

刹那、茲矩の経験と直感がその行動は失策だと警告した。

「——っ」

腹部に熱と痛みが走った。

視線を落とすと義久と自分の体の間を銀の刃が貫いていた。

……自身の体ごとか。

剣神による防刃の加護があるし、更に艦船に使われているのと同様、一部のダメージを全体に分散させる防御術式もある。

元々浅い刀傷だった事もあり、全身に浅い切り傷が生まれるだけで済んだ。

……なんて迂闊な。

考えれば当たり前の事だった。自身のダメージを自動人形に移せる義久ならこれくらいする。

異族相手ならこんなミスはしなかっただろう。

「はっ！」

後ろに跳びつつ上半身の力だけで突きの一撃を見舞う。

過たず喉を穿つが、義久は肉が引き千切れるのも厭わずにバックステップ。

義久の肩越しに自動人形が二体、胴体と喉を破損して倒れた。
やっ和三体。

このまま戦えば勝てるという自信はあるが、あまり時間をかけると竜脈炉の爆発前に撤退出来ない。

義久は因縁のある相手だが心中する程ではないし、自分はまだ六護式仏蘭西の敵でいる必要がある。

……どうするべきか。

決断を迫られた茲矩の目の前に表示枠が現れた。

●

……あー、痛い。

国行を握りながら義久は内心でぼやく。

手中の神格武装のお陰で傷は消えるが痛みのような違和感が残る。
おそらくは脳の誤作動だろう。

これが地味に厄介で気が抜けない戦闘中でも容赦なく集中力を奪う。

しかし今は一息つく事が出来た。

茲矩が眼前に表示枠が展開した事で動きを止めていたからだ。

「……くっ！」

通神を一瞥した茲矩は苦虫を噛み潰したような表情を作る。

「……了解した。扇を用意しておく伝えてくれ」

そう言って表示枠を消し、

「決着は関ヶ原で付けよう。せいぜい竜に食われないよう注意するんだな」

物騒な言葉を残して茲矩は離脱した。

周囲を確認すればM・H・R・Rの包囲戦士団も撤退を始めている。マクデブルクの掠奪が終了に向かっているという事だろう。部下から追撃を進言されたがとんでもない。

「あのままじゃジリ貧だったな」

柄の部分にある流体燃料の残量を示すメーターを見る。

三回の通常駆動でもそれなりの流体燃料を使用してしまった。上位駆動ほどではないが通常駆動でも燃費は悪い。

「それにしても関ヶ原か。そこまで私が嫌いか」

けれどそれも仕方ないかと義久は思う。

聖譜記述に則って雲芸和議という尼子家にとって不利な和睦を結んだり家臣を殺したりした。

他者に嫌悪される要素は十二分にある。

故に、だからこそ、

「——歴史再現に守られた貴様が何を言っても無駄と知れ」

……国を滅ぼす暗君の宿命を背負う事になった私の気持ちが分かるものか。

それは亡命者を纏める公の立場として決して言ってはならない私の言葉だ。

自覚はあるのだが、ついつい吐き出さなくなる時がある。

……けど今ので愚痴は終わり！

「さあ、行くか。前総長救出の功があれば今後の待遇も安泰だろう」

●

それから間もなく、北西の空に太陽が生まれ、照らし出された月の下、一つの時代が終わりを告げた。

名：亀井・茲矩

属：A・H・R・S・

役：対毛利家先鋒

種：近接武術師

特：忠臣

名：尼子・義久
属：Ecole de paris
役：銃士隊長
種：近接武術師
特：尼子家当主

滅びゆく都市の元主従（後書き）

まあ、史実の亀井茲矩は尼子義久に仕えていた訳ではないんだけどね。

やっぱり戦闘シーンは苦手だ。

あと、軍神や剣神の加護って聞くと何だか不安になるよね。

航空都市の嫉み者共

あの野郎

許さねえ……！

配点（嫉妬）

その日、彼は実家の手伝いに勤しんでいた。

彼の実家は商店で、アクセサリーや小物を販売している。

神道系の白砂台座だけでなく英国の”大属の芸術”などとも提携していてデザインや種類は豊富だ。

カウンターでそろばんを弾きながら時間を潰していると来店があった。

犬臭い忍者と金髪巨乳だ。アリアダスト教導院三年竹組に在籍する彼にとっては同級生であり、学内でも時々顔を合わせる。

二人は店内を見回り、陳列されたアクセサリーを手にとって眺める。

「メアリ殿、これなんてどうで御座る？」

「私は点蔵様を選んだものならなんでも」

「いやいや、自分の方こそメアリ殿が気に入ったものなら破産覚悟で買っで御座るよ」

「まあ、点蔵様ったら」

バキィ！ と持っていたそろばんが砕けた。

そして心の深いところから込み上げてくる激情があったが、何とか営業スマイルを維持する。

それから二人は十分ほど商品を吟味した後、お揃いのブレスレットを買っていった。

「……」

手伝いが終わると同時に彼は店を飛び出し、

「エマージェンシーエマージェンシー！」

彼が魂の叫びを上げれば周囲に無数の表示枠が展開する。

映っているのは年頃の男が多いが、年配の男や女性の姿もある。

「これより緊急会議を開く！ 者共、集まれ！」

呼びかけにJud・と返答があった。

彼は満足げに表示枠を消し、走る速度を速める。

辿り着いたのは一軒の家屋。

ここは表向き禁教の集会場という事になっており、外から中の様子を窺う事は出来ない。

入ってすぐのリビングで先程表示枠で連絡を取り合った面々が彼を迎えた。

彼は空いている場所に座り、早速店で遭遇した一部始終を話した。それに対する反応は、

「うぜえ……」

「忍者こけて股間強打しろ」

「……え……誰？」

「温暖化活性化の罪で逮捕しろよ」

「いやあ、むしろ俺の体温が下がったぞ」

「ちよつと触手×忍者のネーム切ってくるわ」

口々に憤りを吐露する。

また、M・H・R・R・出身の男性が鬼気迫る形相で紙に文字を書き殴っていた。

「もげるもげるもげるもげるもげるもげる……」

何でも独逸に古くから伝わる民間術式で、文字の力を具現化出来るらしい。

「つかさあ、この前も往来で副長交えてセックスがどうこう言ってたぞ」

「あの……えつと、名前は思い出せないが忍者の蛮行はそろそろ許し難い」

彼等は人呼んでしつと団。主に公共の場での風紀の取り締まりを主任務としている。

語源には諸説あり、一説には（バカップルに対する）座り込み活動（sit down）からだと言われている。

その歴史は古く、神代の時代には存在していたとされる。

長い歴史を誇るだけにメンバーは世界各地にいる。

最近の研究ではプラトンもしつと団の一員であり、歴史再現で独

身を貫かねばならず、更に史実の方が男色家であったと気付いた時、彼は苦悩と失意で狂乱し、僭主にレスリングを仕掛けて幽閉されたとかされなかったとか。

他にも、師であるソクラテスが入団しようとするも全会一致で拒否されたという話もあるが、真偽は定かでない。

「あーくそ！ 何か制裁加えたいけど、あんなんでも一応王配だしなあ」

「エロゲ地雷（ヴァージンクイーンエリザベス）も無効化されるとは想定外だったぜ」

「天然も良いよね」

「食事に下剤混ぜたけどそっこで看破された」

「『らめえええ！ そこは汚いで御座るうう！』と」

使命を果たす為に議論を重ねていると、不意に、

「制裁を加える方法がない訳ではない」

口を開いたのはメアリを慕って英国から転校してきた異族の青年だ。

「聖譜記述によれば、次期英国国王であるジェームズ一世の父親、ダーンリー卿は暗殺されている」

「――！」

メンバーの中に衝撃が走り、皆は互いに顔を見合わせた。

「武蔵はヴェストファーレン会議で行動の是非を問われる訳だが、やっぱり聖譜記述には従っていた方が他国の心証もいいよな」

「……これは謀反じゃない。ただ歴史再現を実行しようとしている

だけだ」

「歴史再現じゃあ仕方ない」

「まあ、一応特務だし、殺すのもあれだから九割殺しくらいで勘弁してやるか」

「では俺はボスウェル伯辺りを襲名出来るように頑張ろう」

うんうんと皆は頷き合う。

内通、調略、造反、暗殺。

裏切りと謀略渦巻く戦乱の世において、また一つの陰謀が練り上げられていった。

航空都市の嫉み者共（後書き）

英国史について調べてる時につい思いついたネタ。
アニメが始まってから創作意欲が高まってヤバい。

大三島の戦姫

どうしてこうなったのだろう

いつまでこうなのだろう

いつまでこうしていられるだろう

配点（アイドル）

四国。世界側でいうなら未開大陸。

武蔵が停泊している陸港から伊予の居留地への街道を正純は歩く。道中、塩の香りが混じった風が彼女の肌を撫でた。

何故こんなところにいるかというと、父から居留地にいる知人に手紙を渡すよう言われたのだ。関所の前にいるだろうから行って渡してこい、と。

久し振りの会話が親子らしくない事務的なものだった事に寂しさを感じつつも、正純は了承した。

断れば更に距離が広がると思ったからだ。

歩きながら正純は以前調べた知識を掘り起こす。

伊予の居留地は少々特殊な立ち位置なのだ。

未開拓で不毛な重奏領域が多いので自活が難しく、また聖連のトップである教皇総長がいるK・P・A・Italiaに近い。

……聖連寄りだと言われてるよな。

程なくすると関所が見えてきた。

門の脇には狩衣を着た男性が木製の椅子に腰かけている。

背もたれのない簡素なものだ。恐らく他から持ち込んだのだろう。

窺っていると、男性と視線が合った。

「もしかして正信の使いか？」

「はい、父からです」

そう言っ手紙を渡す。

「……確かに受け取った。正直、余計な真似なんだがな」

と、男性の足下に積っていた砂が風もないのに動き、文字を形作った。

『こんにちは』『初めまして』『ハロー』『お嬢ちゃん今暇？』

「……これは？」

「知らないか？ 四国に住んでる珪素系の異族だ。聖連は個人ではなく「アボリジニ」という民族単位で襲名させているな。俺は個人的にイバヌマと呼んでるが」

「そうなんですか」

「そうなんだ。えっと……」

自分を見ながら男性が戸惑ったのを感じ、正純はまだ名乗っていない事に気付いた。

「アリアダスト教導院二年梅組、本多・正純です」

「……ああ、梅組か」

……何だ今の沈黙！

正純の焦りをよそに男性は「ノブタンの娘だもんなあ」と呟き、

「俺はこの居留地の代表をしている大祝・安舎だ」

居留地の代表と聞いて正純は身を固くした。

あるいは父が配達を頼んだのは政治家志望の自分への気遣いだったのかもしれない。

正純が思考を巡らせる中、イバヌマが素早く動いて新たな文字を作った。

『違う』『否』『違うよ』『鶴姫』『くれーんぷりんせす』
「鶴姫？」

正純は首を傾げつつ記憶を探る。

この時代、その名前を持つ人物は複数いるが、四国で鶴姫といえ
ば大三島の鶴姫だろう。

時折物語の題材にもなっており、正純も子供の頃に彼女が出る本
を読んだ覚えがある。

最近も「極東のジャンヌ・デ・アーク」という神肖戯画（テレ
ビアニメ）が放送している。

……しかし、何故この場でその名前が出る？

一方の男性はばつが悪そうな顔で視線を落とした。

「……余計な事を言うんじゃない」

『伊太利亚』『愛蘭』『独逸』『鶴姫』『墨西哥』

「……今更か。言っただろうになる連中じゃなかった」

男性は不本意ながらも納得したようだったが、正純は困惑を深め
る。

「あの、どういう事なんですか？ 鶴姫って……」

あー、と男性は頭を掻き、

「本多君は武蔵生まれじゃないな？」

「あ、はい。三河の生まれで、武蔵には今年から」

「だよな。……まあいいや、どうせ遅いか早いかの違いだ。武蔵の連中は大体知っている事だし」

男性は体を僅かに浮かして椅子に座り直す。

「昔、居留地への支援と引き換えに対西班牙戦に駆り出されたんだ。一種の傭兵だな。本来は妹が鶴姫を襲名して派遣される予定だったが、直前のトラブルで俺が襲名した。教皇総長も既に実績があった俺の方が良かったみたいだしな」

ただ、と鶴姫は脱力を滲ませながら続ける。

「連絡ミスで一般生徒には妹が来ると思っていたらしい。しかもうちの一部の馬鹿が「外貨獲得だあ！」とか抜かしながら妹の写真集を売ってたからな。買う方も買う方でフライングで同人誌作ってる奴等もいたし。性格や一人称が違うところじゃないぞ」

『触手』『百合』『凌辱』『クロスオーバー』

「味方のK・P・A・Italiaや六護式仏蘭西勢はおろか、三征西班牙の連中までがっかりしてて……拳句偽物扱いだ。撃退した筈なのに何だか負けた気分だった」

……実は武蔵だけじゃなくて世界規模でそんな感じなのだろうか。

「聖譜記述では戦いの後で鶴姫は入水自殺する事になっていたが、向こうはまだ俺の力を有用だと判断したらしく、解釈が認められた。

俺が契約しているオオヤマツミは海神でもあったから、その加護を利用して三十分ほど海に浸かり、それを入水自殺の解釈としたんだ。……先程の偽物説と合わせて本物が自殺したと思われた時は否定を放棄したが」

話が進むたびに鶴姫はテンションを下げていく。

「……悲劇的な最期、という認識が広がったせいで今でも創作分野で人気あるのは流石に頭を抱えたな。真相知っている筈の奴等もしっかり同人誌作ってるし」

『最近』『流行』『トレンド』『女性化』『カップリング』『義頼』『異世界召喚』『反逆』『ハーレム』『新作』『エロゲ』『戦乱の姫巫女』『初回盤』『予約受付中』『だよ』

「まあ、うちの連中に限ってはある程度許容してやりたくもなるんだがな。色々閉塞感抱えてるだろうし、息抜きになるなら——現実が思い通りにいかなくても想像なら自由だ」

「……やっぱり、極東に生まれると多くを諦めないといけないんでしょうか？」

不躰だと理解しながらも思わず問いかけていた。

副会長になって半ば物置になっている生徒会室を見た時、正純は失望を抱いた。

しかし、それが今の極東の現状なのだとあっさり受け入れる自分もいた。

だからこそ、他人が現況をどう思っているのか知りたかったのだ。

「……」

鶴姫は顎に手を当てて幾らか思索し、

「こんな場所に押し込めた聖連への憤りもあれば、曲がりなりにも彼等の支援で生活出来たという事実もある」

外に広がる乾燥した無人の荒野に視線を送り、力なく息を漏らす。

「難しいよなあ。重奏統合争乱終結から既に百六十年。今生きてる極東人は居留地生まれだ。根幹の部分で支配されているのが当たり前になってるかもしれない。それでも、不自由は感じるし、そういう意味では松平には期待してる。うちはどうちかというところ西軍寄りだし、末世もあるが」

「それは――」

「……ちょっと待ってくれ」

突然鶴姫が正純を制止した。その理由は明白。
鶴姫の視線はイバヌマに向いていた。

『非常事態』『ワーニング』『品川』『喧嘩』

「武蔵が来ると騒ぎが起きやすいから目を光らせてたが、案の定か。何が原因だ？」

『決闘』『聖戦』『浅間様が射てる』『ヒロイン論争』『攻め受け』
「……仲裁する気なくすなー。止めるけどさ」

『Jud.』『出陣』『ゴアヘッド』『ヒヤッハー』

不意に、正純は肌に感じる熱が急激に上昇したのを感じた。

足下の空気が揺らぎ、猛火が生まれる。

炎は竜のようにうねって鶴姫の体に巻きつき、先端が鶴姫の顔の横で止まる。

「すまないが本多君。俺はこれで」

鶴姫は手短に告げ、武蔵の方へ駆ける。

「……私も帰るか」

手紙を渡した以上、正純も留まる意味はない。

結局、望んだ回答が得られたとは言い難かったが、これまでの人生で思い通りになった事の方が少ないのだ。

なかなか上手いかないなと苦笑して正純は帰途につく。

名：大祝・鶴姫
属：伊予居留地
役：大山祇神社宮司
種：全方位神奏術師
特：同人界の偶像

大三島の戦姫（後書き）

「史実の男性を襲名した女性キャラは多いけど、その逆はないな。ノリキは未遂だし」「ワムナビの遣いー！ 早く来てくれー！」「（アニメを見つつ）え、四国にも居留地あるんだ」
これらの気持ちたちが融合して爆誕。

正純出したのは割とノリ。本編前だからまだ色々吹っ切れてないね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6972x/>

舞台裏の出演者達

2011年11月29日12時46分発行